

2026年度 広島市立大学 一般選抜（後期日程）  
（国際学部）

**小論文**（90分）

2026年3月12日

**注意事項**

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は**5ページ**あります。  
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合には、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 3 解答用紙は**2枚**です。解答はすべて解答用紙の所定の場所に記入しなさい。
- 4 解答用紙とは別に、下書用紙が**2枚**あります。必要に応じて自由に使用しなさい。
- 5 受験番号は、すべての解答用紙の所定の欄（2か所）に必ず記入しなさい。
- 6 解答用紙は持ち出してはいけません。
- 7 配付した解答用紙は、試験終了後にすべて回収します。
- 8 試験終了後、問題冊子、下書用紙は持ち帰りなさい。

このページは空白である。

## 問題

次の文章をよく読んで、あとの問いに答えなさい。

「多文化共生」や「異文化理解」という言葉があたりまえのように使われています。そのときに出てくるのが、「異なる文化を学ぼう」とか、「違いを受け入れる寛容さが大切だ」といった言葉です。

ところが、この一見、他者理解をめざすような態度には、じつは大きな問題が潜んでいます。そこには自文化と異文化はまったく異なるという揺るぎない前提が隠れている。異文化に寛容になろうと言いながら、まったく相容れない乗り越えがたい差異があることを前提にしてしまっている。それは本来あるべき姿勢とは真逆とも言えるものなのです。

自文化と異文化は違う。その境界線に沿って差異が見いだされる。

たとえば、「イスラムの文化を学び、尊重しましょう」と考えること自体が間違っていると思う人はあまりいないと思います。それでも、そこには日本文化とイスラム文化を切り離された存在として見ようとする姿勢があります。これではすでに引かれている境界線を前提にその差異を再確認して、境界線自体を強化してしまっている。

どうすれば、その差異を乗り越え、境界を揺るがすことができるか。それこそが異文化理解の目指すべき姿勢なのに、乗り越えがたい差異があると考えるところからはじめている。

学生のなかには「多文化共生」や「異文化理解」に興味があって、日本と外国の文化の違いを調べようとする人が少なくありません。たとえば、国際結婚のカップルがどのように文化の違いを乗り越えて理解し合うのか、といった調査計画をもってきます。でも、そういう学生には「その異文化理解という言い方自体が、異文化理解的じゃないんだよ」と伝えます。だいたいは何を言われているのかわからず、きょとんとした顔をさしてしまうのですが。

「わたしたち」と「かれら」の境界線は、ひとつの固定したものではありません。むしろ複数の線の引き方があります。イスラムを信仰している人のなかには男性もいれば、女性もいます。だとしたら「日本人」と「イスラム教徒」という線の引き方だけが唯一の境界ではありません。男性と女性という境界線を引けば、日本人の半分とイスラム教徒の半分は、同じ「仲間」になります。

子どもと大人という線を引いてもいいでしょう。地球温暖化などの環境問題を考えるときは、宗教の違いよりも、若い世代と上の世代との利害対立のほうが重要になる局面もあります。「宗教」や「国境」という線引きだけで私たちは「分断」されているわけではない。むしろ、その境界がひとつしかないとする前提こそが、深い「分断」があるかのようなイメージをつくりだしている。

そんなとき、異なる複数の境界線を引くことが既存の境界を乗り越えるために必要な想像力になります。だから「異文化理解」を考えたいのなら、ほんとうに「異文化」なのかどうか、どんな意味で「異文化」とされてきたのか、そこで引かれている境界線とそれに沿って見いだされている差異そのものを疑うところからはじめないといけない。

複数の境界線を引いてみると、どの境界線によって浮かび上がる「差異」も、けっして絶対的なものではなくなります。国や宗教の違い以外にも、私たちはさまざまに異なっている。そう考えると、日本と外国を最初から「異文化」だとみなす考え方が、いかに狭い見方がわかるでしょう。

そんなことできるのか？と疑問に思う方がいるかもしれません。でも、じつは、私たちは歴史的にそういう境界線の引きなおしをずっと繰り返してきました。

人間は差異に満ちた他者とともに生きてきました。そのなかで、いろんな他者を「わたしたち」にしてきた。それは3万8000年前まで人が暮らしていなかったと考えられる日本列島も同じです。歴史的にみれば、さまざまな人びとがいろんな場所から流入して生活するようになり、敵として互いに殺し合ったり、暴力的に占領したりする関係にあったにもかかわらず、「日本人」というひとつの仲間意識が浸透するようになりました。

つまり、「わたしたち」と「かれら」との境界線を開き、別の境界線でくくりなおす作業をずっと行ってきたのです。ただし一度、境界線が引かれると、それが固定化し、しだいに唯一の絶対的な境界線に見えるようになります。多様な人びとがいる日本列島に、ずっと昔から単一の文化を持つ日本人だけが暮らしていたように錯覚してしまう。そのことがひとつの弊害をもたらします。

これまでも見てきたように、「わたし」はその輪郭を維持する必要がある。それは「わたしたち」でも同じ。ただ、それを変わらない絶対的な輪郭だと勘違いしてしまうと、その輪郭を維持するために、異質な他者が見つけたされ、差異が強調され、排除される。だからそれをずらす技法が必要になります。

世界に「わたし」はたった一人しかいません。「日本人」とか、「〇〇人」とか、一般化された人がいるわけではなくて、あくまで一人ひとりが複数のあり方をかねそなえた「わたし」でしかない。

日本人はこうだとか、〇〇人はああだとか、おおざっぱな話が世の中にはあふれています。政治家の口から、日本はずっと単一民族だったとか、そんな言葉が悪気もなく出てくる。でも、その政治家に「国民の安全を守ることが大切だ」とか、「国益を考えるべきだ」と言われると、そうかもしれないという気もしてくる。

「わたし」が「日本」という国の枠組みに結びつけられるのは政治的な場面だけではありません。オリンピックで日本代表が活躍すると、自分が成し遂げたわけでも、知り合いでもないのに、なんだか誇らしい気持ちになる。それも、「国民」や「国益」と同じ「ひとくくり」によってもたらされる感情です。

つまり、それぞれに独立した固有な「わたし」は、近代社会においてもかならずしも一貫して存在しているわけではありません。むしろ、ばらばらになった「個人」が直接、「国家」という単位と結びつき、「わたし」のアイデンティティの欠かせない柱になりつつある。「わたし」が固有な「わたし」である前に、まず国家の一員として位置づけられる。それはときに危険なことでもあります。

著名な経済学者のアマルティア・セン（1933～）は、『アイデンティティと暴力』のなかで、世界中で起きてきた紛争や暴力は、選択の余地のない唯一のアイデンティティという幻想を通じて継続してきたのだと書いています。「テロとの戦い」「反米」「反イスラム」といった単一の線引きでひとくくりにされた「わたしたち」が暴力へと扇動・動員されてしまう。

「わたし」という存在には、複数の境界線の引き方がある。「日本人」であると同時に、「女性」であったり、「キリスト教徒」であったり、「非正規労働者」であるかもしれません。

でも、ある種の暴力へと動員されたり、その暴力の標的にされたりするとき、複数の「わたし」のうちのひとつだけが唯一のものとして選ばれてしまう。国民なら国のために命を賭けて戦うのは当然だ、〇〇教徒は危険な敵なのだから殺してもいい。私たちはそうした暴力に曝<sup>さら</sup>される可能性がつねにあります。

出典：松村 圭一郎『はみ出しの人類学——ともに生きる方法』（NHK出版、2020年）より抜粋。必要に応じて表現等を変えてある。

**問** 下線部「異なる複数の境界線を引く」とはどういうことか。本文の内容を踏まえ、具体的な例を挙げながら1,000字以内で論じなさい。